

非破壊分析の実例とその課題

— 伝世の慶長一分判・天保二朱判・万延二分判・

西脇 康

天保小玉銀、出土の小判形金属片 —

1 はじめに

■**収集界の眼差し** 古貨幣収集界でも、近年非破壊分析が盛んなようであり、かつ出土銭貨を取得したとのいくつかの論考も発表されている。

収集界の著作には、古貨幣への強い愛着とそれに対する取得・占有願望がちらつき（趣味は批判されるべき対象ではない）、なかには古貨幣の希少性（いわゆる分類のための再分類を繰り返して珍品を選別・獲得した結果得られる所産）を誇示し、有利な取引を企図する実利性に富んだものから、入手の経緯に至る楽しいエッセーまで実に多岐にわたる。収集家の皆さんは決して小さくない自己資金を投資して、真剣に古貨幣に向き合って取得されており、その収集談議は以下に述べるように、まさに傾聴に値するものと思われる。

■**史料批判が大切** しかし論考・提言のなかには、にわかには首肯できない感性に訴えたもの、「つまみ食い」や「孫引き」による不適切な引用や、

典拠が示されない断定的表現がみられるものもある。歴史学の研究者からすれば、史料批判がまったくないかあまりに緩く、江戸時代の著作・編纂物はもちろん、古文書では書いてあることすべてを、事実として論理展開している傾向がみとめられる。近藤重蔵『金銀図録』は弟子たちに編纂させた工房の編纂物であり、論拠なしで短文の解説が付されることなど、利用するには十分な注意が必要である。ところが、収集界ではまるでバイブル的カタログの扱いである。記録・記述に対しては、原典にあたりなおしたり、他の史料との比較検討を通じた客観的検証が必要なのである。

■**収集界のレガシー** それはともかくとして、看過してはならないことは、収集界の柔軟かつ自由な発想による指摘のなかに、いわゆる職業研究者が学ぶべき多くのことが含蓄されていることである。古貨幣に対する理想的な保存措置や真贋判定・分類着目の視点は、もっぱら収集界で生み出され、長年月かかって培われたもので

あって、一般的博物館の学芸員よりは格段に優れた歴史の実績を誇っていて、その扱いも丁寧かつ適切である。きちんとした定期的な手入れもしないか、できないかの博物館よりも、譲渡・取引が生々しく一筋縄でいかない問題は絡むものの、収集家から収集家へと大切に所有転移され、良好な環境で保存され続ける方が、古貨幣自身にとっては、むしろ仕合わせかもしれないとすら思われる。

また収集の歴史を紐解けば、なかには資産家が投機や資産の保全・維持の対象としたり、その資本にものをいわせて乱獲・独占した「所有」例もある。けれどもそれは一部であって、本物の収集家には、たんなる所有欲（占有・独占）という一般概念では解説できない、ある種の崇高な「覚悟」が随伴している。名品の獲得とは一時「預かる」（保有）のであって、しかもその人の「器」（人徳・品格・見識）が要請されると言われてきたゆえんである。いわば古貨幣の伝世品は、収集家の文化的かつ社会的な責任を伴って継承されてきたというエビデンスがある。

かつての収集界では門外不出で秘蔵されたり、門外の概して「上から目線」の職業研究者に対しては、冷淡で閉鎖的な傾向がありがちであったが、近年は開示・協力・科学分析に理解を示す収集家や業者が多くなっている。したがって、研究の前進と共有のためには、節度をわきまえた紳士的な交流が望まれるのであって、歴史学界・考古学界・分析科学学会などの不幸な棲み分けや敵対関係だけは避けたいものである。

ところが、貨幣史の職業研究者のなかには、現物貨幣を知らないことが客観的研究にとつて免罪符だと勘違いして、収集行為をひたすら嫌悪する方が、ほんの一部にいても事実である。出土銭貨に対する冷徹な鑑識眼を鍛えるため、博物館相当施設の古貨幣（かつて民間から取得された伝世品）だけでなく、収集界で回遊している伝世の古貨幣を含めた研究を行う考古学者が台頭しつつある。

■**金属組成開示の要請** 冒頭に翻つてみれば、収集家による非破壊分析とその開示が先行して流行していることには、古貨幣業者の肉眼による「目利き」の真贋鑑定だけでは、もはや納得できない収集界の風潮の一端が背景にあるとみなされる。古貨幣業者も、稀少で高価な古貨幣のオークション取引などについては、購入者・依頼者に限定して数年だけ真正品であることを保証する組合鑑定書（転売されると法的効力は失効するが、一定程度の信頼の目安とはなる。

詳細は要照会）だけでなく、非破壊分析によるその金属組成結果の客観的開示が、収集家に強く求められていることを認識すべきであろう。そんな時代にすでに突入しているわけで、業者としての早急な対応も望まれているのであろう。

■**非破壊分析の危うさ** さて、考古学界や古貨幣収集界において、最近つとに盛んとなった非破壊分析法！ それ自体は歓迎されるべき動きであり、けつして制限されたり、咎められたりしてはならない。しかし、昨今のウェブの世界で典型的なようにフェイク情報が多く、さまざまのマスメディア情報は慎重な点検を経なければ信じられなくなっている。同一の条件下であれば、選ばれた特定の者だけでなく、だれが分析しても同じ結果が得られる再現性の確保が理想的である。そもそもは、分析結果をみんなが共有しあうには、いかなるルールづくりが必要かというのが提言の動機である。

以下に述べることは、それぞれの立ち位置もあって、必ずしも正論でないかもしれないが、それらへの自覚がないとすれば、杞憂が一層募らざるを得ない。みなさんに議論してもらっためのたたき台として提言したい。

マシーン（ハード）が優秀だからといって、誰でも、いや素人である筆者がやっても客観性を担保した同一の結果数値が得られるはずだとする、間違つた思い込みや予断はないであろうか？ 発表された結果数値がマシンの一回だ

けの「生」数値なのか、複数回試みた結果を誰かがその見識によつて「解析」した数値なのかの確認をしないで、無批判に論文に引用して論理展開や解説するという非科学的で不適切な行為をしていないか？ あえて収集界と考古学界全体に警鐘を鳴らしたい。

今日、そもそも結果数値がどのようにして得られたものなのか未詳か、省略・割愛されたままでありながら、その結果数値に全幅の信頼が置かれ、一人歩きさせられていないであろうか。非破壊分析法の原点に立ち戻つて、筆者の少ない「経験」を述べながら、再考をうながしたい。

筆者は、一九九九年（平成一一）から加速器をつかつたピクシー分析法（PIXIE 荷電粒子励起X線分析）に参加させていただいている。また、計量の管理・運用という実務に従事しておられる研究者を中心に、一九七八年に創立され、国際科学史会議の傘下で日本学術会議協力学術研究団体の（一般社団法人）日本計量史学会の理事（副会長）もつとめている。したがって、まったくの門外漢ではないと思われる。ただし、以下に述べる内容の責任は、すべて筆者に帰属するものであることを、あらかじめお断りしておく。

2 非破壊分析の一例

まず、筆者が参加している具体的な分析例を